

敦煌はシルクロードの要衝に位置したが故に、この地の攻略をめぐる、羌・月氏・匈奴・漢・吐蕃・西夏など、多くの民族が興亡した。

前秦の建元二年（三六六年）、ゴビの砂漠を杖錫していた楽僊という僧によって、敦煌の東南十八里、鳴沙山の断崖に石窟寺院が開かれた。莫高窟千仏洞と名付けられたこの寺院は、唐代には一千余窟を数え、数千体の彩色の仏像、美しい壁画、そして前庭には寺院仏閣が薈を並べていた。それがオアシスの緑と一体になって、河川に映ずるさまは、まさに塞外の江南の様相を呈し、碑文はその壮麗さを「神秀の幽巖・靈奇の淨域」と記している。往古、大いなる光輝の都「敦煌」を訪れ、莫高窟の絢爛たる仏教美学に接した旅人は、その尊厳な庶民文化に心打たれ、折々の感動を文学作品に歌い上げている。

私は少年時代より西域の文化に心ひかれ、中でも砂漠の美術館といわれる敦煌莫高窟に強い関

「大いなる光輝の都」の文学

山田勝久

心を抱いていた。そのため大学進学時は、何のためらいもなく中国文学を専攻し、敦煌学に取り組んだ。以来、二十五歳の歳月が流れ、その間「敦煌二十詠」・「張議潮變文」・「女人百歳篇」・「敦煌碑文」・「大目乾連變文」等々、数多くの研究成果をまとめることができた。また、敦煌学の研究のため、たびたび莫高窟の調査に出向き、いま九回を数えている。今後、二十回、三十回と敦煌の土を踏むことであろうが、それは文献学のみから脱却したところの、総合的な学術研究を目指すからである。

仏教の生命尊嚴の哲理を、絵画的な技法と塑像の美学で具現しようとした莫高窟、その存在を可能たらしめたのが、砂の海に浮かぶオアシス・敦煌である。私は千年に渡って、シルクロード最大の仏教都市として繁栄を究めたその思想的基盤を解明するとともに、その美と心を詠いあげた敦煌変文を中心とした文学作品の研究に、さらに強い決意で取り組むことを誓う昨今である。

（やまだ かつひさ・北海道教育大学教授―中国文学）